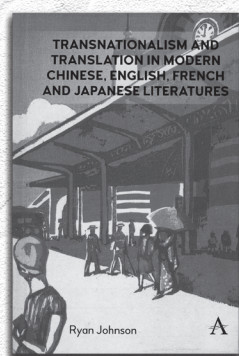


今井 亮一



Ryan Johnson

Transnationalism and Translation in Modern Chinese, English, French and Japanese Literatures

Anthem Press, 2021

ライアン・ジョンソン著

近代中国・英米・フランス・日本文学におけるトランスナショナリズムと
トランスレーション
翻 訳

評者の見立てでは、近年の世界文学論は、世界システム論との距離に応じて、大きく二つないし三つの潮流に分けられる。つまり、まず大きく、世界システム論に対して「肯定」派と「否定」派に分けられ、前者はさらに積極的援用派と消極的容認派に分けられると思うのだ。

具体的に言うと、積極的援用派の代表格には、言わずもがなフランコ・モレットティが挙げられる。彼の「世界文学への試論」は、「経済史の世界システム学派から最初の仮説を借りてこよう」と明言している通り、イマニュエル・ウォーラーステインに依拠して「世界文学システム」を検討している¹。そんなモレットティの衣鉢を継いだと言えるのがウォリック・リサーチ・コレクティブで、彼らは「世界文学への試論」に関して意義を認めながらも、それは「at the cost of any deep engagement with the relationship between world-systems theory and the idea of the world-literary system 世界システム論と世界文学システムというアイディアとのあいだの関係について深く考えることを犠牲にしたがゆえだ」²と批判的にコメントして——つまり、モレットティ以上に世界システム論を詳しく参照しつつ——主に「peripheral realism 周縁的リアリズム」³を検討している。

次に、評者が消極的容認派と呼ぶなかには、例えばデイヴィッド・ダムロッシュの『世界文学とは何か？』が挙げられる。同書でダムロッシュはモレットティの手法に対して、「世界共通のパターンの分析に向いているのは、個別文化のごく一部にすぎない」と問題点を鋭く指摘し、(モレットティの「遠読」とは逆に) 個別作品へ接近して分析している⁴。ただし、そこでは作品を読むことに加えて、「ある文化の規範やニーズは、世界文学として入ってくる作品の選別に深く関与しており、翻訳のされ方、販売のされ方、読まれ方に影響をおよぼしている」ことも意識されている⁵。すなわち、流通や翻訳や生産——これらが『世界文学とは何か？』の第一、二、三部それぞれのタイトルであることも示唆する通り——が世界文学を生み出す前提となっている。であれば、近現代において、文学作品という一種の商品の流通・翻訳・生産を司っている機構として世界シス

テムはあるのだから、世界システム論がそもそもの前提として（消極的に）容認されていることになる⁶。2021年について邦訳が出たレベッカ・L・ウォルコウィッツの『生まれつき翻訳』も、「書物の多くは〔…〕同時に、あるいはほぼ同時に、複数言語で生まれるのである。生まれたときから世界文学なのだ」という現状認識のもとで書かれているので⁷、ダムロッシュ同様、世界システムを世界文学の前提としている。あるいは、アレクサンダー・ピークロフトが『世界文学の生態系』において、古代から現代に至るまで、主に文学の流通範囲という環境条件を「生態系」の比喻で捉えて、作品の形式や内容の変遷を辿っているのも、物質的条件が先立っているという点では世界システム論容認派と見なすことができる。ただし、通常の世界システム論が近現代のみを対象とするのに対し、ピークロフトはもっと長い時間的スパンを実証的に検討しているのは、特筆しなければならない⁸。

最後に、世界システム論「否定」派に関して。まず明記しなければならないのは、評者がここに分類する論は、ウォーラーステインの世界システム論そのものを否定しているわけではないという点だ。そうではなく、世界文学研究に世界システム論を援用したり前提として用いたりすることに否定的だという意味である。端的にはペン・チェアの次の言葉が分かりやすい——「The fact that circulation is the fundamental material condition that enables the hypertrophy of literary meaning clearly attests to Damrosch's identification of worldliness with global circulation. [...] Franco Moretti is of the same persuasion. 文学的意味の肥大化をもたらす根本的な物質的条件が流通であるという事実は、ダムロッシュが世界性とグローバルな流通とを同一視していることを如実に示している。〔…〕フランコ・モレッティも同じ確信を持っている」⁹。つまり、世界文学の「世界」が「世界システム」と無条件に等号で結ばれている現状をチェアは批判している¹⁰。あるいはアーミル・ムフティは、そもそもゲートの時代から今に至るまでの、世界文学という枠組みに孕まれるオリエンタリズムを実証的に批判している¹¹。したがって、西洋（西欧）中心的な世界システム論からは見えない世界文学を目指す議論だという点で、「否定」派に属すると言える。また、翻訳可能性ばかりが重視される状況への批判、すなわち流通・翻訳の前提視に異議を唱えたエミリー・アプターの『反世界文学』も、こうした見解の先駆と分類できるだろう¹²。

こうして世界文学論への「肯定」派と「否定」派に分けてみると、後者はポストコロニアリズムや反西欧中心主義的見解を前面に打ち出していることが窺える。これは無論、そもそも世界システム論が資本主義の進展を描き出す理論である以上、自然と西欧由来の植民地政策のもとらした現状を「肯定」しているように見えるからに他ならない。だが、ここで「肯定」派とした論は、植民地政策などの西欧中心的枠組みを美化しているわけでは当然なく、彼らに言わせれば現状を地に足をつけて分析しているだけであり、むしろ「否定」派の議論は現状と乖離したある種の理想論だということになるだろう。とすれば、「肯定」派と「否定」派はイデオロギー的対立を繰り返すだけとなり、対話の機会も生まれようがないと思われる。世界文学論はここからもう発展のしようがないのか。現状を現状として受け止めつつ西欧中心主義から脱する枠組みは不可能なのか。

＊

ライアン・ジョンソンの『近代中国・英米・アメリカ・フランス・日本文学におけるトランスナショナリズムと^{トランスレーション}翻訳』は、近年の世界文学研究を上述のように捉えている評者にとって、新鮮な視点をもたらせてくれるものであった。序章と第1章「Literary Worlds and Degrees of Distance 文学世界と距離の度合い」で提示される本書の理論的枠組みでは、「the totalization of world systems 世界システムという全体化」を伴う世界文学論を「strong 強い」理論と呼び、逆に本書の立場を「weak theory 弱い理論」とする¹³。こうして、上で評者がイデオロギー対立としてまとめた構図を、むしろ方法論の差異へまとめ直す。この「弱い理論」を可能とするのは、虚構世界あるいは可能世界としての「literary worlds 文学世界」(25、節題など)と、複数の「文学世界」がもたらす「ontological vagueness 存在論的曖昧さ」(42、節題など)である。分析美学や哲学などを参照した綿密な議論を紹介する紙幅も評者の力量もないが、ごく簡単に言えば、そもそもひとつの文学作品のうちにも様々な「世界」があり(例えば杜甫の詩には禅仏教と道教がともに重要な要素として文学世界を形作っているし〔6-9〕、古今和歌集には各短歌〔≡各世界〕からだけでは見えない、全体を貫く季節をめぐるコスモロジー〔=「the deep-level ontology, the entire constellation of belief 深いレベルでの存在論、信仰の星座の全体」〔34〕〕がある〔32-34〕)、ゆえに文学作品は多次元的で、完全なる理解には到達不可能な曖昧な存在である、といった意味だ。強い理論はこうした文学作品を、自らに理解可能なものへ平板化してしまう。そうではなく、「断絶、裂け目、ある概念がどこかの文学世界から別の文学世界に移されないこと、あるいは途中でまったく別のものになることに注意を向ける」のが、「弱い」世界文学」を掲げる本書の意図である¹⁴。

第2章からは具体的な事例が分析されていく。かくして文学世界の類似よりも相違に重きを置く以上、歴史的に異なる「文学世界」・「信仰の星座」を持ってきた、いわゆる東洋と西洋が天秤の左右の皿に載せられるのも必然というべきだろう。おそらく正確に言えば、近代以降の洋の東西の交流を考察する上で、それぞれがそれぞれから影響を受けて何かを取り入れれば、「途中でまったく別のものになる」のは自然というか不可避である。だが、特に西洋が東洋を「別のもの」に変えて取り入れれば、即座に西欧中心主義とか文化盗用といって批判するのが近年の主流に思われる。確かにこうした批判も一理あるが、そう批判するだけで終われば思考停止ではないか。本書が「弱い理論」を掲げるのは——実際、「making something strange make sense in a contemporary belief system 奇異な何かを現代の信仰体系で理解できるものにする」こと(47)が「強い」理論の効用である以上、例えば文化盗用だと言って片付けることも「強い」理論であるだろう——こうした(やや安易な)批判の枠組みに陥ることなく東西交流を論じるためだと考えられる。

具体的に紹介していくと、第2部は「Dramatic Worlds 演劇的世界」と題され¹⁵、まず第2章ではテッド・ヒューズと作曲家の周文中が共作を試みたオペラ『バルド・トドゥル』(『チベット死者の書』)が論じられる。続く第3章「What We Disagree about When We Disagree about Nō 能について意見を異にするときに我々が意見を異にすること」では、能「邯鄲」と、それに影響を受け

た場面をもつポール・クロードルの戯曲『Le Soulier de satin 緞子の靴』（ならびに関連エッセイ）、そして三島由紀夫『近代能楽集』の「邯鄲」が比較される。いずれの章も東洋の過去の文物を西洋近代の表現者が理解しようとしつつ、しかし特に宗教的な面で理解・吸収しきれない様が論じられる。あるいは三島の場合は、能と一続きとされる日本文学の伝統のうちにはあるが、三島の『近代能楽集』の意図が「シチュエーションのほうを現代化」（83に引用）することにあるように、三島は、霊が現れる能をもはや夢幻能と殊更にジャンル化しなければ理解できない近代の作家でもあるため（117）、クロードルよりは翻案元に近いが十全に能の世界を理解できるわけでもない。こうして比較の距離を見定めていくのも、「弱い」理論の面白さである。

第3部は「Poetic Worlds 詩的世界」と題され、4章ではクロードルと九鬼周造の詩が扱われる。1920年代にフランスとドイツで学んでいた日本人の九鬼と、日本で外交官を務めていたフランス人クロードル。彼らのあいだに直接的な影響関係があるというより、「each had labored arduously to make ideas from the other's tradition fit with his deeply held native beliefs 両者とも、他者の文化の概念を、自らに深く根付いたネイティブの信仰に適合させようと必死に努めた」（125-26）という境遇の類似から比較されるのである。5章では北島とヒューズが論じられる。いずれも母国を離れた詩人である二人が自らの「伝統」をどう見ていたかが検討される。北島に関してはアメリカ移住後に中国的アイデンティティを強く持つようになったこと、ヒューズに関しては英国という国家的枠組みからヨークシャーという地域的枠組みへ伝統の担い手の単位が変遷したことなどが論じられ、それが両者の中国をめぐる作品（ヒューズにおいては自作の詩「The Trance of Light 光の恍惚」を書き換えた「Chinese History of Golden Water 黄金の川の中国史」、北島では『時間的玫瑰（時間の薔薇）』）にあらわれていることが精読によって示される。ついでながら、スティブン・オーウェンの有名な北島批判である「What Is World Poetry? 世界詩とは何か？」への鋭い反論が展開されているのも面白い。

第3部の最後にして本書全体を締めくくる終章では、「弱い」世界文学を掲げ、「[it] attends as much to impasses as to bridges 橋と同じく袋小路にも注目」してきた本書全体の議論が確認される——「But what counts as an “impassé” only comes before our eyes when we view literary works in light of the deep ontological assumptions that support them, and in contrast with incompatible ontological schemes from elsewhere. This is why I have been devoting much of my attention to the concept of tradition itself. ただし、「袋小路」とカウントされるものは、どこか別の場所の両立不可能な存在論的枠組みと対照しながら、「袋小路」を支える深い存在論的想定（ペイダオ）の光のもとで文学作品を見たときにのみ、我々の目の前にあらわれる。だから私は、伝統というコンセプトそのものに大いに注目してきた」（195）。比較文学を研究しているとしばしば直面する批判的な問い、つまり、なぜそれらの作品・作家を比較するのかという問いへの見事な回答である。「どこか別の場所の両立不可能な存在論的枠組みと対照」するからこそ見えてくる特殊性＝「袋小路」こそ、比較文学の存在意義であるはずなのだ。その袋小路を、実はわざわざ比較しなくても分かる何かになぞらえて理解する——「強い理論」によって「橋」とする——世界文学は、確かに限界を抱えているだろう。

本書末尾では九鬼の墓地が紹介される（196-97）。正面には仏教の形式に則って「九鬼周造之墓」

と彫られ、別の面には西田幾多郎が選んだゲーテの詩の古風な日本語訳が彫られているという。各面が曖昧な関係を結びながら様々な伝統を会わせ、ひとつの確乎とした物体を形作る様は、確かに本書における多次的で曖昧な、しかし確かに存在する世界文学の提喻となっている。「弱い理論」や「曖昧さ」をキーワードとする本書も、そんな言葉とは裏腹に、世界文学の確かな手触りを感じさせてくれる。

もっぱら理論的枠組みの新しさに注目してきた本稿からでも、すでに本書の意義は明らかだと思われるが、さらに付け加えれば、本書で取り上げられているケーススタディの題材自体、無知な評者には学ぶことが多かった。また、タイトルが示す通り、中国語・英語・フランス語・日本語の作品を研究対象としているが、全て原典から解釈されているという多言語性も、本書の記述を確かなものとしている。さらに、ほとんどもっぱら小説に注目する世界文学研究の潮流に対し、戯曲や詩のみを集中的に論じているのも、野心に満ちた清新な試みである。

*

もっとも、本書を自身の研究に援用する際には注意も必要だ。例えば、「存在論的曖昧さ」を説明する上で、次のような記述がある。

When a reader or translator encounters a text in a different language, she is unlikely to know all of the dimensions of the text. She cannot know, for instance, all of the significances of all of the words found in the *Genji Monogatari* as they might have been known to the members of the Heian Court in which that text was produced. She cannot know all of the ideas and intentions of *Genji*'s author, Murasaki Shikibu. She cannot know for certain how the various religious and philosophical beliefs circulating in Heian Japan — Shintoism, Buddhism, Confucianism — would have affected the contemporary reader's reception of *Genji*. Hence, the composition of the world of *Genji* is already vague for the contemporary reader.

読者や翻訳家が異なる言語のテキストと出会えば、テキストの全ての次元を理解できるということとはまずない。例えば『源氏物語』中の全ての言葉の意味を、テキストが生み出された場である平安朝の人々が理解したように理解できることはない。作者である紫式部の考えや意図の全てを理解することもない。平安時代の日本で流布していた様々な宗教や哲学の信仰——神道、仏教、儒教——が当時の読者の『源氏物語』受容にどう作用したか、確実に理解することもない。したがって、『源氏物語』の世界の構成は、同時代の読者にもすでに曖昧なのである。(2-3)

言うなれば本書の鍵概念は、一種の不可知論が支えているわけである。評者としてはこの不可知論は、論者の知的謙虚さの表れだと思し、また本書において重要なのは、異文化の影響を受けた表現者にこの不可知論が適用されるからこそ、断絶がもたらす新たな創作、次なる文学世界が(不)可能になる様が描き出される点である。しかし、例えば『源氏物語』の専門家であれば、

それを「異なる言語」で受け止める場合でもそうでなくとも——もっとも、先に三島と能について見たのと同じく、平安時代の古文を「異なる言語」でなく研究対象とする者は現代においては皆無であろうし、また本書の主張を究極的に敷衍すれば、全ての言語は個人言語として「異なる言語」になると思われるが——テキストの一言一句を、その思想的背景を含めて当時の人々のように理解しようと努め、「紫式部の考えや意図の全てを理解」しようと努めるはずである。言うまでもなく、こうした学究の賜物がそれでもぶつかる不可知論と、そもそも対象は不可知だとして理解の努力を端から放棄する「不可知論」はまったく異なる。だが、本書の枠組みに安易に従えば、後者の「不可知論」に転じてしまう虞は大きい。こうした危険は、安易に「無神論」と自称してしまうような「信仰の星座」を持つ日本人であれば、理解しやすいだろう。ここに、敢えて不可知論という宗教的な用語を使っておいた意味がある。つまり、神の存在を徹底的に考え抜いた挙句たどり着いた無神論と、積極的に神を信仰してはいないが、困ったことがあれば「神さま仏さま！」とすがる「無神論」との差異である。

とはいえ、こうした理解もまた、評者の想定する日本的視座でライアン・ジョンソン論を理解したものであり、かくして世界文学研究もまた「多次元性」を孕んだものとして進展していくし、いかねばならない。最後に本書から引けば、「A single approach to comparative literature or East-West literature will never be agreed upon, but the very nature of “our” study, “our” here designating the group of people who believe they are engaged in comparative literature, thrives on competing perspectives. 比較文学ないし東 - 西文学への単一のアプローチなど、決して同意されないだろう。だが、「我々の」研究の性質そのもの、ここでは比較文学に従事していると考えている人々を指す「我々」、それは衝突し合う視点の上でこそ栄えるのだ」(194)。

注

1. フランコ・モレットティ「世界文学への試論」秋草俊一郎訳『遠読——〈世界文学システム〉への挑戦』秋草・今井・落合一樹・高橋知之訳、みすず書房、2016年、65-90頁（引用は70頁）。
2. The Warwick Research Collective, *Combined and Uneven Development: Towards a New Theory of World-literature* (Liverpool University Press, 2015), p. 57, note 8. 以下、英語文献からの引用は拙訳を用いた。
3. Ibid., 2章の章題より。
4. デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会、2011年（引用は49頁）。
5. 同書、50頁。
6. 実際ダムロッシュは、「森と木の両方を見なければならない」（同書、49頁）と述べている通り、モレットティを批判こそすれ全否定していないことは大いに留意すべきだろう。だからこそ、秋草俊一郎も苦言を呈している通り、『世界文学とは何か?』における有名な世界文学の定義のひとつ、「世界文学とは、翻訳を通して豊かになる作品である」（同書、432頁）を単に引用するだけでは、よく翻訳される≒売れる≒世界システムの流通に適した作品が世界文学であるという、ただの現状追認の堂々巡りにしかならないのだ（秋草の見解については次の書評を参照——「郭南燕著『志賀直哉で「世界文学」を読み解く』（作品社、二〇一六年）」『比較文学』59号、213-215頁）。本文の次段落で触れるベン・チェアも参照。

7. レベッカ・L・ウォルコウィッツ『生まれつき翻訳——世界文学時代の現代小説』佐藤元状・吉田恭子監訳、田尻芳樹・秦邦生訳、松籟社、2021年、12頁。
8. Alexander Beecroft, *An Ecology of World Literature: From Antiquity to the Present Day* (Verso, 2015).
9. Pheng Cheah, *What Is a World?: On Postcolonial Literature as World Literature* (Duke University Press, 2016), pp. 29-30.
10. その代わりにチェアが世界文学に見出そうとするのは、「the ethicopolitical horizon it [=the normative force] opens up for the existing world それ〔＝規範的な力〕が既存の世界に拓く倫理・政治的地平」である (Ibid., p. 5)。この点の詳細は、もちろんチェアの著書に当たっていただくのが最善だが、日本語文献としては拙著『路地と世界——世界文学論から読む中上健次』(松籟社、2021)を適宜参照されたい。
11. Aamir R. Mufti, *Forget English!: Orientalisms and World Literatures* (Harvard University Press, 2016).
12. Emily Apter, *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability* (Verso, 2013). なおアプターは『The Translation Zone 翻訳地帯』においてもすでに翻訳不可能性を取り上げてはいたが、同書ではそれと翻訳可能性とのあいだで揺れ動いていたと思われる。
13. Ryan Johnson, *Transnationalism and Translation in Modern Chinese, English, French and Japanese Literatures* (Anthem Press, 2021), p. 11. 以下本書からの引用は、原則、本文中にページ数のみを記す。
14. 本文中では日本語の文脈に合わせて語順を若干変えたが、原文は次の通り——“‘Weak’ world literature pays attention, on the contrary, to the disconnections, the ruptures, the ways in which concepts from one literary world don’t get ferried across to another world, or become something else entirely on the way.” (47)
15. ちなみに第1部は第1章のみで構成される理論的パートで、「World Literature, Literary Worlds ひとつの世界文学、いくつもの文学世界」と題されている。